



震災1か月後の宮古市田老と堤防（4月8日）



引き波で引きはがされた防波扉（4月8日）

・・・持続可能な社会に向けて・・・

津波・子ども・ボランティア

～一中学教員の経験した被災地の現状～

高松市立協和中学校 岡本 利

4月7日東北へ

2011年3月11日、おそらく多くの中学教員は、卒業前後のあわただしくも貴重な時間を過ごしていただろう。私も、卒業式を終え、中学校を巣立ったばかりの子どもたちと思い出話をしていた。そこへ、あの東日本大震災のニュースと映像が飛び込んできたのだ。

私はスマトラ沖大地震が起きる4年前、平成12年に岩手県宮古市田老の地域の方々の聞き取り調査を基に「津波」を教材化した。明治・昭和と近年だけでも2度の大津波に襲われ、その甚大な被害にもかかわらず、住民は故郷を捨てなかった。そして、日本の万里の



子どもたちの笑顔が、被災者全員の支え（4月11日、グリーンピア三陸みやこ）



地元小学生ボランティアが夕食の配膳をがんばっていました（6月13日、グリーンピア三陸みやこ）

長城とも称えられた、町をX字に貫く大堤防を築き、津波に立ち向かう道を選んだことを紹介する防災学習である。

高松市立協和中学校でも地理的分野で、この授業を行ったばかりの3月に震災は起こった。そして生徒たちから出た言葉は「先生、田老はどうなったの？授業で見た先生といっしょに写真に写っていたおじさんは大丈夫なの？」であった。この言葉に力を得て、4月7日、高松市の人々からの支援物資を積んで田老に向かうことを決意した。

田老の実際

さまざまなメディアを通じて、自分なりに予備知識や現状認識を深めていたつもりであったが、まったく十分ではなかった。テレビ映像から伝わらないにおい、廃墟の町が360度広がったなかに立つことの恐ろしさ、そして自分が知っている懐かしい町が、すっかりその姿を変えているという現実を受け入れら

れない心境。外部の訪問者でさえ、こうなのだから住民の方々の心境は想像を絶する。

田老の堤防は、X字状から、一部が崩壊しY字状になっていた。残った堤防では上部の照明灯が、グニャグニャに変形し、波が堤防を大きく越えたことを物語っていた。波が侵入した町は、堤防だけを残して破壊されていた。がれきの中の堤防から無念さが伝わってくる思いがした。数tもある鉄製の防波扉は、海のほうへ引き剥がされて横たわり、いわゆる引き波の強大な力を示していた。

破壊のなかでこそ、わかるものもある。田老港から、西へ数十mの微高地にある「出羽神社」は、無傷で、四方のがれきを見下ろしていた。海から真っすぐに上がっていく急な階段が、避難場所としての機能を神社にもたせており、津波に関する「先人の知恵や願い」を強く感じた。境内の焚き火の跡と、脱ぎ捨てられた衣服や毛布が、あの時から時を止めているかのように思えた。

ボランティア活動の実際

田老の人々は、駅や堤防のある町の中心部から、8kmほど離れた高台の宿泊運動総合施設「グリーンピア三陸みやこ」へ避難されていた。4月初旬は、震災直後の緊急避難場所としての位置づけから、食事・衣服・住居の提供による持続的生活機能をもつ場所へ変容を重ねている最中であった。

ボランティアの仕事は大きくとらえると、行政の仕事のうち、多くの時間と人手が必要で、かつ公的な判断を必要としない業務であるといえる。具体的には、施設外部に設置された簡易トイレ約50か所の清掃、3回の食事の準備・片付け・ごみ管理、灯油ストーブの給油および余震などの緊急時の消火、支援物資の整理整頓などである。ストーブの管理に

関しては、配給されていたストーブが外国製ということもあって、対震自動消火機能がなく、ストーブの横で就寝、午前4時の震度5の余震の際は、本当に慌てたものだ。

そして、このような活動を何日も行って初めて、被災者の方が本音で接してくれるようになったと私は感じた。食事が終わってほっとする時、余震で目が覚め、寝ることができなくなって外にいる時、被災者の口から、いろいろな話が聞けた。「亡くなったおじさんが食事の時に『好きなものから食べる。津波が来たら食べられないぞ』と言っていたことを、思い出す」と語る人。出羽神社に避難した人は「つらかった。目の前で町が流された。ここまのまれると本気で思った」と語ってくれた。そして印象的であったのは「ここで田老を捨てたら、先人に申し訳ない。津波に負けたことになる」とおっしゃっていた女性。「先人」の思いを語るのは、学者でも、行政でもなく田老のおばちゃんなのだ。この地元の方々の協力を得て、11年前にお話を伺ったおじさん、掘子福司さんと再会。心配した生徒に無事を報告できる喜びを感じた。

復興へ

6月19日の合同慰霊祭の後に、グリーンピア三陸みやこから、ほぼ全住民が仮設住宅へ移った。電気製品やなべまでも揃った住宅に、多くの方々からの義援金などの支援の成果を感じた。しかし被災者の心配はつきない。とくに高齢者の多い田老では、今後孤立しがちな環境を改善し、地域のつながりを持続する方策を講ずる必要があると、被災者自身が語っている。それぞれの立場で、それぞれができる支援を考え、探し、実行する。今、こうして自分の拙い経験を発表することも、そんな支援の一つと考えている。